

江戸



宝永南海地震の津波高を表示している大島小学校

背景

嘉永7年(1854)11月5日の大地震は、この年が甲寅^{きのえとら}の年であるため「寅の大変」と言われ、また11月27日に改元されて安政元年となったため「安政の南海地震」とも言われます。この地震については、宿毛市の浜田家に「甲寅大地震御手許日記」という記録があり、当時の地震とその後の様子をうかがい知ることができます。なお、嘉永7年の地震では、津波は大島の鷺神社の石段7段まで上がったことが記されています。さらに宝永4年(1707)地震の津波はそれ以上に大きく、石段42段の高さにまで達したことが記録されています。

アクセス 鷺神社

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より南西へ直線距離約2km
- 宿毛市大島
- 緯度経度 北緯32度54分57秒, 東経132度42分13秒



嘉永七年(一八五四)十一月五日、空はよく晴れ、寒気も厳しい朝でしたが、昼からは暖かく、よい天気でした。夕日が片島の上に落ちようとした時に、突然大地震が起こりました。

この後、日没までに二回、夜中に七、八回も地震があり、宿毛の町の家は、大半つぶれ、その上に火災が発生して、大変な騒動^{さわごう}となっていました。家が潰れる度に土煙があがり、人々は火事だと騒ぎました。しかし、津波が来るといつて皆が騒ぎ出したので、火を消そうとする者もなく、宝物一つ取り出す者もなく、皆が一目散に山上へ逃げ上がりました。

そのうちに、大きな潮音とともに津波が押し寄せ、八反(約九〇メートル)の大堤を通り越え、一丈(約三メートル)程も水田の中に潮が入り、日の入り頃までに宿毛の町の中にまで潮が来ました。この津波の騒ぎで、人々は山上に逃げており、出火をしても消すものもいなかったため、火勢はいよいよ盛んになり、本町、真丁、牛の瀬、沖須賀、仲須賀の大半は焼けてしまいました。

大島は四日の朝、小地震(注:安政東海地震が一月四日に起きている。)で潮が差したので、注意していたため怪我人はありませんでしたが、津波は鷺神社の石段七段まで上がり、洞泉寺の障子端まで来ました。潰れた家は極めて多く、流れた家は一三、四軒でした。

六日も何回か小地震があり、津波も来ましたが、町の入り口までで大したことはありませんでした。

七日の昼過ぎ、かなり大きな地震があり、小地震は何回もありました。人々は和守神社の付近に仮小屋を建てて夜を過ごし、殿様は人々に炊き出しを行いました。夜中にも何回かの小地震があり、津波も来たので、人々は安心して眠ることができませんでした。